

研究室名	神経生物学研究室 学会発表
------	----------------------

【発表者について】アンダーラインは本学教員、研究員および技術職員、○は発表者、※は大学院生、卒研生または卒業生

発表時期	2018年6月23日
学会名	日本生化学会関東支部例会
演題名	ネオニコチノイド系薬剤のマウス経口投与によるゲノムDNAのメチル化の変化および脳内遺伝子の発現変動
発表者	<u>和賀央子</u> 、○※ <u>清水仁美</u> 、※ <u>横森将輝</u> 、 <u>大沼一富</u> 、 <u>内野茂夫</u> （神経生物学研究室）
内容	<p>2018年6月23日に、埼玉大学において日本生化学会関東支部例会が開催され、大学院1年の清水仁美がポスター発表を行った。1990年代初めに開発されたネオニコチノイド系薬剤は、昆虫のアセチルコリン受容体に種選択的に作用することから、日本を含む世界各国で農薬として汎用されている。近年、これらの本剤が脳に移行・蓄積されることや妊娠期の親マウスへの過剰な投与により仔マウスの不安行動を亢進させる可能性が示唆されている。本研究では、ネオニコチノイド系薬剤が脳の遺伝子発現におよぼす影響を明らかにするために、ゲノムDNAのメチル化解析、さらにそれらの遺伝子の脳内での発現変動について検討した。その結果、ネオニコチノイド系薬剤（ジノテフラン、イミダクロプリド）の過剰な経口投与により、ゲノムDNAのメチル化や遺伝子の発現に影響をおよぼしたが、その標的遺伝子は各薬剤により異なることが判明した。</p>
関連画像	